

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の(①)～(⑩)の中に入る言葉として適切なものをあとの【語群】から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、同じものを二度用いてはいけません。

1. これからの時代は、特別な技術を持つ人が(①)されるだろう。
2. 新しい法案の(②)をまとめる。
3. 彼は来日して間もないが(③)の日本語なら話せる。
4. 長年話を進めてきた計画が突然(④)に浮く。
5. 新校舎(⑤)を記念して式典を開く。
6. ブームに(⑥)して商品売る。
7. (⑦)ながら、お父様にもよろしくお伝え下さい。
8. これ以上の被害を出さないために(⑧)を講じる。
9. 首相の(⑨)表明演説をテレビ中継で見える。
10. 地球温暖化に対応するための(⑩)を打つ。

【語群】

チュウ	シヨシン	マツピツ	コツシ	ゼンゴサク
カタコト	ラクセイ	フセキ	チヨウヨウ	ビンジョウ

問二 次の文の文節数を算用数字で答えなさい。

友達を私の家に招いて、昨日作っておいたカレーとケーキでもてなした。

問三 次の1～3の――線部と同じ種類の語が使われている文を一つ選び、記号で答えなさい。

1. 寒さで全身こごえてしまう。

- ア 自転車で九州まで旅をしたい。
 イ あまりの重みで缶がつぶれる。
 ウ 明日にでも荷物が届くだろう。
 エ この橋は石で作られている。
 オ いったいどこで遊べばいいのか。

2. もうお別れの時間となりました。

- ア 仲間とともに花見へ出かける。
 イ 天気予報によると明日は晴れた。
 ウ はやく会いたいと伝えられた。
 エ 春もなかばとなったようだ。
 オ おじと祖父とが駅で待っている。

3. 運動場で走っているのは姉らしい。

ア 彼女の飼っている犬はかわいいらしい。

イ 実にスポーツマンらしい潔い態度だ。

ウ 彼はわざとらしい言い訳を繰り返す。

エ 兄が高価らしい石を見せてくれた。

オ めずらしいことに今朝は早く起きられた。

問四 次の——線部の言葉の使い方が正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア あと一步のところでライバルに渡りに船でじゃまをされた。

イ 彼はいつでも泰然自若としてあわただしく動き回る。

ウ 先生にほめられ、青菜に塩をふったように元気になる。

エ あなたには、言いたいことが爪のあかほどもあります。

オ 急な転勤が決まり、家中が上を下へのおおさわぎになった。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、すべて句読点などの記号も字数に含みます。

地球上の生物は、どの生物も、遺伝子的な仕組みは同じとされます。遺伝子的な仕組みは同じでも、生命活動のやり方は、たとえば植物と人間ではひどく異なります。実は、どの植物も、また人間を含むどの動物も、それぞれ独特のやり方をしていても言えます。人間も、コウモリと同様、地球上で何か特別な存在というわけではありませんが、その生命活動のやり方は、光ではなくて音を使って外界を把握する独自のシステムを発達させたコウモリの場合と同様、実はひどく変わっていると言えるのではないのでしょうか。

人間の場合の特殊性は、たとえば大脳皮質の可塑性がそれを象徴的に示していると思います。人間の人間らしい、人間に特有の活動を可能にする能力とか可能性というのは、それがどのようなものであるにせよ、大脳皮質のような身体的部位に、実現される可能性のすべてがあらかじめ書き込まれているというようなことはないと考えられます。

A 言語能力というのは、具体的には日本語を話したり理解したりする能力として、あるいは英語を話したり理解したりする能力として実現されますが、最初からそういうものとして（日本語を話したり理解したりする能力として、B 英語を話したり理解したりする能力として）あったということではなくて、最初は、言語能力一般として（というよりは、言語能力以外の能力をも可能にするもつと一般的な能力とか可能性として）あったと考えられます。そのような能力のことを、ここでは、¹第一次的な可能性（ないし第一次的な能力）と呼ぶことにしたいと思います。それに対して、実際に実現された日本語の能力のようなものは、²第二次的な能力（可能性）ということになります。

遺伝子的な仕組みによって最初に実現される、大脳皮質のような身体的組成というものは、人間の場合、第一次的な可能性ないし能力の、ある意味では、全体であると考えられます。私たちの生きている身体そのものは、おおざっぱには、私たちの能力とか可能性の総体（私たちが実現し得る能力とか可能性の全体と、実際に実現できた能力とか可能性の全体とを合わせたもの）であると言うことができると思います。他方、日本語とか英語というようなものは、それ自体は文化的構築物であって、遺伝子的な仕組みの外にあるものです。それは、直接的に身体組成の延長上にあるものとは言えないと思います。C、私たちはそれを内部に取り込んで、身体的能力の一部として（あるいは、身体的能力の一種の拡張として）実現するのだと思います。この「外部にある文化的な構築物を、第二次的な能力を実現する際に、内部に取り込む」というやり方、これが人間の場合には決定的な意味を持つのだと考えら

れます。

感情についても、言語及び言語以外の文化的構築物（身体的動作とか表情）に依存する部分があると言える分だけ、言語能力の場合と同じように考えてよいと思われます。感情に関わる基本的な能力というのは、遺伝子的仕組みによってヒト（ホモ・サピエンス・サピエンス）としての私たちに備わっていると言えます。しかし、そのような能力は、何らかのX⁶的に養育ないし教育されることによって文化的変容を遂げる（そのようにして、外部にあるものを内部に取り込む）ということがなければ、結局は、動物と同様の水準にある、原始的な「叫び声」とか「唸り声」として発現するような能力として止まり続ける以外にないと思われます。

さて、ここからが問題です。自然種としてのヒトという生き物は、そういう意味では、ある仕方でのあり方そのものが変わって別の存在になる（文字通りの意味で「別の生き物」になる）、それが人間になるということである、そう考えるべきであるように思われます。私たちの正体は、D、ヒト（ホモ・サピエンス・サピエンス）なのですが、何か「あり方の本質的な変化」とでも言うべきものが「ヒト」と「人間」の間にはあることになるのだと思います。この変化は、私たち現生人類の歴史上、そう遠くない、ある時点で起こった出来事（人類学者とか考古学者が「ビッグ・バン」とか「象徴の爆発」と呼んでいる出来事と、おおむね重ねて考えることができると思われます）であると思うのですが、上で言ったことからすれば、実はそれは現代社会に生きる私たち一人ひとりに生じるものでもあると考えるべきでしょう。人間の場合の特殊性というのは、私たち一人ひとりの問題だからです。この変化によって、私たちが何か特別な存在になるということではありません。しかしながら、私たちが、合理・不合理というところが問題になるような、そういう存在になった（あるいは、そういう存在になる）というのは、この「あり方の変化」によってではないかと私は推測しています。

その場合、私たちが別の存在になるのに本来に必要とされるのは、純粋に自然的で身体に内部的なプロセスではあり得ないでしょう。そのようなプロセスというのは、第一次的な能力とか可能性だけを準備するものでしかないと考えられるからです。そうすると、私たちがヒトから人間になるのは、正確に言えば、あらかじめ遺伝子的に組み込まれた自然的・内部的なプロセスを通してではないということになります。もちろん、この「ヒトから人間になる」プロセスは、いつどのようににはじめてもよいとか、どのように

進行してもよいというものではないと考えるべきでしょう。言語習得に「臨界期」というものがある（狭くは、およそ二歳から四歳くらいまでと考えられています）とされることは、そのことを端的に示すものだと思います。それは、一言で言えば、内部的なプロセス（大脳を含む身体的組織の成長と発達）に合わせて、外部的なプロセス（教育とか養育を通して、身体の外にあるものが内部に取り込まれるプロセス）が進行するという形をとるものと思われます。その際、もし外部的なプロセスの進行が、内部的なプロセスの進行に対して、何らかの理由によって決定的に遅延したり遅滞したりすると、場合によってはもはや取り返しがつかなくなると考えられます。

言語能力は、直接的に身体組成の延長上にあるものとして考えることはできないと言いましたが、ある意味では、身体的能力を拡張することによって実現することができる一種の実践的能力として考えることができるものだと思います。最も単純に言えば、私たちの言語というのは、もともとは音声だからです。もちろん、音声ですと言って、それで済むような、単純なものではありません。言語能力は、自転車に乗るとか泳ぐといった能力が形成される場合と同じように、X⁷的に訓練を重ねて形成されることになる実践的能力ですが、これがどのような能力かということを理論的に説明するとすると、ひどく難しいことになります。ここでは、言語を使用する能力がどのようなものかという話はしませんが、それは実践的能力の一つであるということとをとかく強調しておきたいと思います。

ところで、私たちの言語能力は、最終的には、私たちに一定の身体的条件が整うことによって、二十歳前後に十分なものとして備わることになると考えられています。言語というのは、もともとは完全に私たちの外部に存在するものであると言えるように思います。もちろん、そう考えない人もいます。しかし、言語ということ、特定の時代に特定の地域で話されていた（あるいは、現に今、特定の地域で話されている）日本語とか英語のことを言う場合には、漠然と「言語能力」と言う場合に比べて、もつとはつきりと「もともとは私たちの外部に存在する」と言えるのではないかと思います。私たちが実際に言語を学習する際に、具体的に学習されることになる日本語とか英語のどの部分であれ、もともと私たちの内部にあったと言えるようなものは何もないと思います。

私たちがヒトから人間になるプロセスというのが、以上のような言語習得に関する考え方をモデルとすることができるとは思いますが、私たちがヒトから人間になる変容というのは、実に奇妙なものだということになります。

- *1 大脳皮質…思考や言語機能を持つ大脳の表面部分。
- *2 可塑性…自在に変化する性質。
- *3 依存…他のものに頼って存在すること。
- *4 発現…現れ出ること。
- *5 プロセス…過程。
- *6 臨界期…境目の時期。

問一 A D にあてはまる言葉として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア もちろん イ しかし ウ あるいは エ たとえば

問二 二か所の X には漢字二字の同じ語がはいります。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 身体 イ 具体 ウ 強制 エ 集中 オ 後天

問三 —線部1「第一次的な可能性（ないし第一次的な能力）」—線部2「第二次的な能力（可能性）」とはどういうものですか。その説明として最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 第一次的な可能性（ないし第一次的な能力）

- ア 日本語を自由自在に話したり、理解したりする可能性。
- イ 生まれた時から持っている、さまざまな能力を身につける可能性。
- ウ 人間の人間らしい、人間に特有の活動を可能にする可能性。
- エ 遺伝子的な仕組みの外にある、将来に向けたさまざまな可能性。

(2) 第二次的な能力（可能性）

- ア 遺伝子的な仕組みは同じでも、異なる生命活動により身体を組成する能力。
- イ 単なる知識としてではなく、身体動作や表情も加えて言語を活用する能力。
- ウ 身体の外にあるものを取り込んで、身体能力の一部として実現する能力。
- エ 身体組織の延長線上にはないが、内部に取り込まれることで拡張する能力。

問四 — 線部3「文化的構築物」とはどういうものですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア その時代・地域固有の精神活動により生み出されたもの。
- イ 現代社会の技術を集めて、多くの人によって作り上げられたもの。
- ウ 歴史や伝統をふまえて、専門家により築き上げられたもの。
- エ 時代や場所に左右されず、誰もが価値を認めるもの。
- オ 生活する上で欠かすことのできない、人間だけが使用するもの。

問五 — 線部4の「自然種としてのヒトという生き物」とはどういうものですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 身体組成の延長線上にあるものを取り込んで能力を高めたもの。
- イ 動作や表情を利用して自分の感情を表現する能力をもつもの。
- ウ 身体的組織によって生まれたときに様々な可能性を持つもの。
- エ 養育ないし教育されることによって文化的変容を遂げたもの。
- オ 原始的な能力を持ったまま止まり続ける以外ないもの。

問六 — 線部5「人間の場合の特殊性」というのは、私たち一人ひとりの問題」について、次の各問いに答えなさい。

- (1) 「人間の場合の特殊性」とはどのようなものですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア 光ではなく、音を使って外界を把握する。
 - イ 生きている身体が、能力とか可能性の総体である。
 - ウ 一次的な能力の個人差が大きい。
 - エ あり方そのものが変わって別の存在になる。
 - オ 獲得した言語で未来がほぼ決定する。

(2) 「私たち一人ひとりの問題」と言えるのはどうしてですか。二十字以上三十字以内で答えなさい。

問七 — 線部6「私たちがヒトから人間になる変容」とありますが、それはどのようなことですか。「一般的な能力」という語を用いて四十字以上五十字以内で説明しなさい。

〔三〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数に含みます。

駅からぼつぼつと続いている商店街に、昼食の選択肢はそれほど多くなかった。この町で降りて何かを懐かしいと感じたことと、午後からの商談のこと、それからみのりのことをちよつと考えていて、店をいくつも見逃していたかもしれない。

入った店は、定食屋の類だった。たぶん夜は酒場に近い店になるのだろう。白木のカウンターがそれらしさを醸し、後ろの棚にはウイスキーのボトルが並んでいる。中にいた髪の長い女性には化粧気がなかった。きれいな顔立ちをしているのにさびしげな感じのするその人は、スーツに大きめの鞆を提げて戸を開けた僕を見てにつこりと微笑み、いらつしやい、といった。その声がだろうか、僕の中のどこかを波立たせた。

合板のテーブルに着くと、女性がおしぼりと水を運んできて、そのままテーブルの横に立っている。

〈中略〉

商談は滞りなく進んだ。この数年で自分のスキルが上がったことに加え、世の中のソフトへの理解度も格段に上がった。 unnecessary 質疑応答が減り、仕事がやりやすくなっている。

契約がまとまって、ほつとしたときだった。さつき感じた懐かしさが濃くなっていることに気がついた。何がどう懐かしいのかわからないまま、僕は応接室の中を見まわす。見当たらない。懐かしいようなものは何もない。

ではこれで、と立ち上がったときに、また香った。懐かしい匂いをかいだ、気がした。違う、懐かしい音楽を聴いた感じだろうか。僕は顔を上げ、相手の顔を A と見た。

「どうかしましたか」

いいえ、と僕は答える。血の流れが滞り、B 逆流しようとしている。

「あの、恐れ入りますが」

思いつきを確かめるべきかどうか、ほんの少し迷った。

「別れの挨拶を、どうおっしゃいますか」

相手は怪訝な顔をしている。

「さようなら、のことですか」

「ええ、そうですけれども、今、その前にちよつと違うようなことをおっしゃいましたよね」

しばらく首を傾げていた相手がようやく、ああ、と照れ笑いをする。

「なまた、ですかね」

「それです、それはこの辺の方言のようなものでしょうか」

「ほんならまた、が縮まったんですかね。まあ、方言ですよ。あんまり意識したことはなかったですけど。私は若い頃は東京にいたもので、話し言葉は標準語だと思ってるんですが、どうでしょう」

どうでしょう、といわれて返答に詰まる。ひとつずつの単語はいわゆる標準語かもしれないが、イントネーションが微妙に違う。喋り言葉は全体的に一本調子で、語尾が歌うように伸びる。久しく忘れていた旋律。

「なまた、以外にも、さようならの意味で使う言葉がありますよね。なんだったかな、ええと」

旋律が耳に残るうちに僕は記憶を遡り、質問を重ねる。なまた、といってみる。

「どうかなあ、子供でも今どきはみんなバイバイってと思いますけどね」

応接室を出ながら僕は焦っている。何か、なんだったか、すごく近づいている。懐かしい風の吹く場所まで、もう少しだ。社屋を出て曇った空を見上げた途端、記憶の中で小さな声が聞こえた。

X

思わず足を止めた。そうだ、X、といったんだ。聞き返すと、あの子は耳まで真っ赤になったのだ。

「なに？」

僕もつい小さな声になった。もう少し大きな声でいつてくれているなら、聞き取れなくてもなんとなく意味はつかめていただろう。でも、言葉そのものがわからなかった。

じ、じ、とあの子はいった。僕は黙って待った。けれども、じ、と繰り返した後、彼女は目にいっぱい涙を溜めて駆け行ってしまった。そんなつもりではなかった。彼女の言葉を他の級友たちのようからかうようなつもりはまったくなかった。ふたりで当番日誌を職員室へ出しに行った後の、児童玄関の薄暗さがよみがえる。スニーカーに履き替えようと上履きを脱いだまま、小学四年生だった僕は遠ざかる彼女の後ろ姿をただ見ているしかなかった。

昼に駅を降りたときからこつこつとノックしていたのはあの子だったのだ。定食屋で女主人に話しかけられたときに感じた懐かしさも、商談の間じゅうずっと僕をざわつかせていたのも、あの子だった。

瑞穂という名前だった。新学期に合わせてではなく、中途半端な季節に唐突に彼女は転校してきた。素晴らしい名前ですね、と担任がいったのを覚えている。

「日本のことを古くは瑞穂の国といったのです」

先生が紹介する間、髪を後ろでひとつに結んだ女の子は黒板の前で恥ずかしそうにうつむいていた。

「……谷川瑞穂です。よろしくお願いします」

彼女がそういってお辞儀をしたとき、なんともしえない空気が級友たちの間に広がった。おかしいことはしていないし、いつていない。それなのに、どこかが変だった。言葉を話するときの波の山がずれる。彼女の言葉は一音の半分の半分ほどずれた旋律に乗せられていて、僕らはそれにどう反応していいかわからなかった。

それでみんな笑ったのだと思う。彼女が話すと、教室のどこからくすくすと笑う声が聞こえる。すると彼女はうつむいてしまう。赤くなった耳と、そこにかかる後れ毛を僕は何度も見た。彼女が授業中に当てられて、緊張のあまり余計におかしくなってしまう言葉遣いを冷やかされるのを何度も聞いた。笑うなよ、と怒鳴ったはずの僕の声は、しかし半径一メートルに届くのがやつとだ。谷川瑞穂がゆつくりと振り返る。その心細そうな顔に光が差しているのを僕は見る。いちばん届いてほしい人にだけ、僕の声は届いたのだ。

じゃあね、だなんて、誰でもいつでも簡単に口に出せる言葉だと思っていた。だけど、そうじゃない。彼女は、生まれたときから親しんできた言葉を、ぱっと脱ぎ捨ててみたいに器用に替えてしまうことができなかったんだろう。あの子は、じゃあね、と

いう代わりに、ほなの、といったのだ。僕に気を許していたからつい出てしまったのか、それとも、僕を試していたのか。ほなの、といわれた僕が自然に手を振り返せばそれで彼女は救われたのか。

確かめようもないことばかりだけれど、ひとつだけ確かなことがある。僕は彼女が好きだった。教室にいる彼女はいつも口を結んでいたけれど、僕は知っていた。この子には、何かがある。いつか花開く力を胸の奥深くに隠している。

Cと曇った空を見上げて僕は少し笑った。十歳の頃から全然成長していないみたいだ。幻想だ。いつか花開く、いつか跳ぶ。そんないつかの予感に揺れていないで、今を見るべきだったと思う。

年が明け、春が来るのを待たずに彼女はまた転校していった。かつて住んでいた土地に戻ったのだと聞いた。それが、ここだ。確信があった。谷川瑞穂はここから来て、ここへ帰っていった。だから懐かしかった。あんなに波立った。

もしかしたら、瑞穂は今でもここに暮らしているのかもしれない。Dおとなになった彼女がすぐそこを歩いているかもしれない。でも、会ってみたいとは思わない。いつもうつむいていた華奢な後ろ姿がどんなふうに花開いたのか、どんな女性になったのか、想像するだけのほうがきつといい。そう考えながら、駅へ向かう道で背の低い町並みを見まわしている。瑞穂がいないか探している。

*1 みのり…「僕」の恋人。

*2 怪訝…理由や事情がわからなくて、不思議に思うこと。

〔秋の転校生〕 宮下 奈都 『遠くの声に耳を澄ませて』より

問一 A Dに入る最も適切な語を選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア どんより イ すっきり ウ ざわざわ エ まじまじ

問二 二か所の X には同じ語句が入ります。これを本文中から三字で抜き出しなさい。

問三 — 線部1「懐かしい匂いをかいだ、気がした。違う、懐かしい音楽を聴いた感じだろうか」とありますが、「匂い」や「音楽」にあたるものは何ですか。本文中から二字で抜き出しなさい。

問四 — 線部2「懐かしい風の吹く場所」とはどこですか。具体的に書かれた部分を本文中から三十字以内で探し、はじめの五字を抜き出しなさい。

問五 — 線部3「彼女は目にいっぱい涙を溜めて駆けて行ってしまった」とありますが、この時の彼女の心情として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 転校生だからといって、無理に話し方を変えようとは思わないが、その態度を「僕」にとがめられ、悔しくなっている。
イ 自分の話し方をばかにせず級友からかばってくれる「僕」に、発した言葉を聞きとってもらえず、ショックをうけている。
ウ 信頼していた「僕」に、その思いを踏みにじられるような態度をとられ、その場にいられないほどつらい思いをしている。
エ いつか花開くときを見守ってくれる「僕」を頼もしく感じていたが、感謝の思いをうまく伝えられず、気が動転している。
オ「僕」が好きでいてくれることはうれしいが、また転校することを思うと、どうにもならないほど悲しく感じている。

問六 — 線部4「僕は遠ざかる彼女の後ろ姿をただ見ているしかなかった」とありますが、この時の「僕」の様子として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 瑞穂をくすくす笑う級友から守ることができなかったことで、無力な自分を責めている様子。
イ 瑞穂の言葉を聞き返したことで思いがけず泣かせてしまい、どうすることもできないでいる様子。
ウ 自分の怒鳴る声が瑞穂にだけは届いていたことを知って、一人で余韻にひたっている様子。
エ 仲良くなれたと思っていた瑞穂に突然置きざりにされ、ぼう然としている様子。
オ 薄暗かったために瑞穂の涙に気づいてやれず、いつまでも後悔している様子。

問七 — 線部5「なんともいえない空気」とありますが、具体的にどのようなことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちとは微妙に違うイントネーションを使う転校生へのとまどい。
イ 授業中に、話し方がずれていることをくすくす笑おうとする冷やかし。
ウ 素晴らしい名前だと先生が紹介したことであいた、仲間として認めたくない敵対心。
エ 中途半端な時期の突然の転校生に対する、心の準備ができていなかったことへのあせり。
オ 転校生の緊張がクラス全体に伝わり、それを受け止めきれない決まり悪さ。

問八 — 線部6「想像するだけのほうがきつといい」とありますが、「僕」はなぜ会わずに「想像するだけ」がよいと考えているのですか。解答欄に収まるように説明しなさい。

問九 この物語を読み終えて、あなたがこれまでの友だちとの関わりの中で後悔していることを、解答欄に収まるようにわかりやすく紹介しなさい。

東大クラス選抜Ⅰ

解答用紙
(50分)

氏名

受験番号

整理番号

得 点

受験番号
整理番号
得点

B			A

一		
問二	問一	
	6	1
問三		
1	7	2
2	8	3
3	9	4
問四	10	5

F	E	D	C											

二

問七			問六		問四	問三	問二	問一	
			2	1	問五	1		A	
						2		B	
								C	
								D	

K	J	I	H	G

三								
問九	問八	問五	問四	問三	問二	問一		
						A		
		問六			B			
		問七				C		
						D		